

タッチされる想像は死の恐怖を緩和するか

アタッチメントスタイルに着目して

○樋口隆太郎 (大阪大学キャンパスライフ健康支援センター)・串崎真志 (関西大学文学部)

キーワード: 死の不安, セルフケア, 触覚イメージ

目的

触覚は原始的な感覚であると同時に、コミュニケーションにも用いられてきた(e. g., Soares, Oliveira, Ros, Grutter, & Bshary, 2011)。ヒトは言語を獲得し、主に言語でコミュニケーションするようになったものの、身体接触(タッチ)による様々な影響を受ける。ボディタッチで情動を伝えたり(Hertenstein, Holmes, McCullough, & Keltner, 2009)、安心感を感じる(Jakubiak & Feeney, 2016)だけでなく、死の不安を低減させさえする(Koole, Tjew A Sin, & Schneider, 2014)。物に触れたいと思わない人は、触れられることを想像することで死の恐怖を和らげたり(樋口・串崎, 2015)、人から触れられたくない人ほど、タッチ想像で死の恐怖を感じない(Higuchi & Kushizaki, 2016)など、直接触れたり触れられたりせずとも、タッチを想像するだけでもある種の変化が生じることが示されつつある。

本研究では、被接触想像が死の恐怖の緩和にどのように寄与しているかをアタッチメントスタイルに着目して検討することを目的とする。

方法

参加者 心理学系教養科目を受講する大学生 176 名(うち男性 99 名, 女性 77 名)が参加した。平均年齢は 19.0 ($SD=1.1$) 歳であった。

項目 (1) 参加者属性として性別, 年齢, (2) 自尊感情尺度(SE) 10 項目(山本・松井・山成, 1982), (3) 接触ニーズ尺度 autotelic 因子(NFT)6 項目(Peck & Childers, 2003), (4) 触覚抵抗尺度(HiT) 10 項目(山口, 2010), (5) 一般他者想定愛着スタイル尺度(ECR-GO) 30 項目(中尾・加藤, 2004), (6) 死に対する態度尺度短縮版(DAP-R short) 12 項目(樋口, 2014), (7) 操作チェック 4 項目, 7 種であった。

手続き 本研究は、関西大学心理学研究科の倫理規程に従って計画・実施した。実施に際して、個人情報保護等の研究倫理に関する説明を口頭と文書で行ない、参加協力を求め、書面への回答をもって同意を確認した。同意した者だけが研究に参加した。参加者は、まず属性, SE, NFT, HiT, ECR-GO, DAP-R short に回答した。次に、想像群は大事な人を思いうかべ、その人から触れられていることを閉眼で、統制群は今日の夕飯について、それぞれ 30 秒間想像した。その後、死の恐怖と操作チェックに回答した。なお、「講義時間」外に実施され、所要時間は 20 分程度であった。

利益相反開示 発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはなかった。

結果

ECR-GO 不安因子を平均値で高低群に二分し、2(条件: 想像・統制) × 2(不安: 高・低) の 2 要因被験者間計画で死の

恐怖について分散分析を行なった(Figure 1)。交互作用で有意傾向が確認されたため($F[1, 170] = 3.158, p = .077, \eta_p^2 = .018$)、単純主効果の検定を行なった。想像条件では、不安低群($M = 2.5, SD = 1.1$)が不安高群($M = 3.4, SD = 1.0$)より恐怖を感じていなかった($F[1, 170] = 12.422, p = .001, \eta_p^2 = .068$)。統制条件では有意差がみられなかった。不安低群では、想像条件($M = 2.5, SD = 1.1$)のほうが統制条件($M = 3.1, SD = 1.2$)より死の恐怖が低かった($F[1, 170] = 5.839, p = .017, \eta_p^2 = .033$)。不安高群では有意差は確認されなかった。条件の主効果で有意傾向がみられ($F[1, 170] = 3.222, p = .074, \eta_p^2 = .019$)、想像群($M = 3.0, SD = 1.1$)は統制群($M = 3.2, SD = 1.2$)よりも死を恐れていなかった。さらに、不安の主効果が有意であり($F[1, 170] = 10.483, p = .001, \eta_p^2 = .058$)、不安低群($M = 2.8, SD = 1.2$)は不安高群($M = 3.4, SD = 1.1$)よりも死を恐れていなかった。

同様に、ECR-GO 回避因子を平均値で高低群に分け、2 要因被験者間計画で死の恐怖について分散分析を行なったが、交互作用($p = .348$)でも主効果($p = .107, p = .587$)でも有意差はみられなかった。

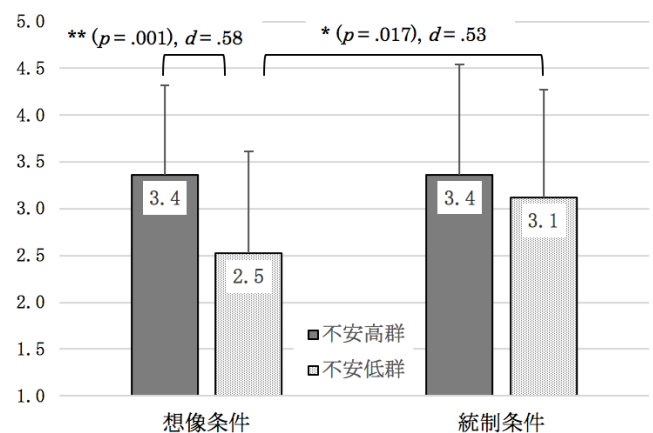


Fig 1

条件(想像・統制) × 不安(高・低)の分散分析

考察

見捨てられ不安が低い場合だけではあるが、タッチ想像によって死の恐怖は緩和されることが確認された。今後は、タッチがアタッチメントを安定させるのか、アタッチメントが安定しているからタッチの影響を受けられるのか、因果関係を含んださらなる検討が望まれよう。

文献

樋口隆太郎 (2014). 死に対する態度尺度短縮版の作成: 妥当性と信頼性の検討. 心理学叢誌, 11, 107-116.

(HIGUCHI Ryutaro, KUSHIZAKI Masashi)